特集

大地震と社会資本・最終回

復旧から復興へ、開発の 足音高く

高らかに響く重機、高らかに聳えるクレーン

震災と行政の対応について、実に多くの議論がなされているが、地震学の専門家はどう考えているのだろうか。また、今後の北海道での大地震の危険性はどうなのか、専門家の分析・見解を聞きたいところだ。一方、震災後の復旧について、ある自治体の技術者は「こんな無駄な投資はない。一度作ったものが壊れたために、また同じものを作るのだから」と嘆いていた。確かに震災による損壊は事業の後戻りを意味し、しかも復旧はあくまで原形復旧が原則で、単に破損箇所の修理をするだけだから、設計・施工に当たった担当者としてはため息しか出ないだろう。今後の地元、管内の発展に向けて新規事業や施策の展開を予定していた担当者にとっては、こうした後戻りにいら立ちすらも覚えるかも知れない。しかし、単年度復旧を原則とする国の復旧事業もほぼ終了し、いよいよそうした基盤をジャンプ台に、南西沖、東方沖地震に打ちのめされた道内は、再び息を吹き返そうとしている。本特集最終回の今号では、力武常次地震予知連絡会前副会長のインタビューの他、基盤整備を専任し、高い技術力を誇る開発局の地元開発建設部の復旧状況と耐震技術、そして地元市町村の復興への取り組みを特集した。

奥尻のシンボルとなったフェリー埠頭向かいの壁画